ーマニ
藤沢・茅ヶ崎・鎌倉・平塚・寒川・逗子
地域密着型フリーマガジン

無料
vol.56
APRIL
2011

特　集

の瞳に変してる特別版
いまこそ、家族とともに。

震災から、僕たちが学んだこと
おちついてネット湘南

連　載

南地産地消図鑑
地産地消の意味を考え直すとき

の街をおもしろくする100人
南工大学 谷本敏夫学長

南百景／湘南大学ノート
んなのアート／hashirigaki
nd more...

自然とともに、ひとは生きる。ここ湘南の自然は、もうすぐ桜を咲かせる。

fujimani FM™

鎌田修広さん
Nobuhiro Kamata

今号の表紙：
鎌田美紀さん
Miki Kamata

2008.11.8 鎌田夫妻の結婚式での、家族の集合写真

特別版

君の瞳に恋してる。

FAMILY

いまこそ、家族とともに。

辻堂在住の鎌田夫妻は、もうすぐ結婚３年目。鎌田修広さんは横浜市鶴見区の出身、横浜市消防局で消防訓練センターの教育主任として日々、日本の未来を担う「タフで優しい消防士(志)」たちを育てている。そして美紀さんは福岡の出身で、現在は平塚にある大学の保健室で看護師として働く毎日だ。別々の場所で別々に育ったふたりは出逢い、湘南の土地の魅力にひかれ、二年前に辻堂海浜公園近くのマンションに引っ越して来た。昨年、ふたりのあいだには新しい命が授けられた。今年の７月２３日が出産の予定日で「ここのところ毎日お腹が大きくなっていきます」と、鎌田夫妻はそう言って笑顔を見せる。ご両親や親戚もみんな、新しい家族の誕生を待ち望んでいるという。2011 年 3 月 11 日。誰も体験したことのないほどの大きな震災が日本を襲い、その余波はいまだに収まる様子を見せない。けれど、ここ湘南で、いや日本中で、こうしてあらたな命がうまれ、また家族ができていく。その家族のために、家族と共に生きるこの国のために、なにができるのか。いまこそ、家族とともに考えてみませんか。

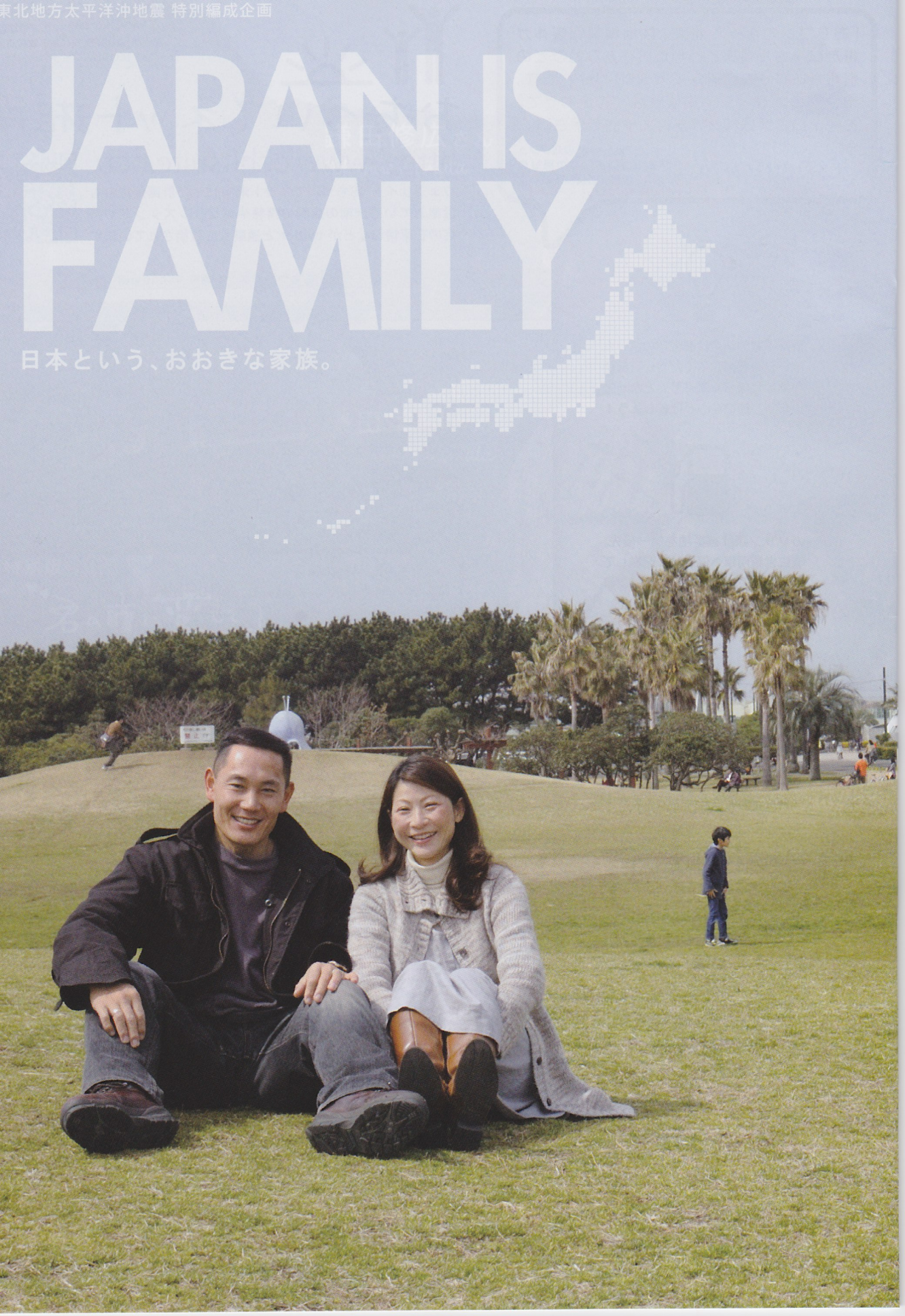
撮影｜三浦悠介

photo & interview YUSUKE MIURA
assistant YOSUKE IKEGAMI,KENJI TORII
location TSUJIDO KAIHIN KOEN PARK

東北地方太平洋沖地震 特別編成企画

JAPAN IS FAMILY

日本という、おおきな家族。



撮影｜三浦悠介

photo & text **YUSUKE MIURA**
location **TSUJIDO KAIHIN KOEN PARK**

いま、わたしたちが湘南からできること。

011年3月11日14時46分ごろ、太平洋三陸沖を震源として史上れにみる大きな地震が発生し、東北と関東に渡って甚大な被害がもたられました。「2011年東北地方太平洋沖地震」と名付けられたこの大災は、発生から現在にわたるまで日本全土に大きな被害と混乱を及ぼしてます。そのなかで、関東圏のなかでは幸運にも極めて被害の少なかった南」に住むわたしたち。その住人として、何ができるのか？　何をすべなのか？　今回は特別編成として、そんなメッセージを伝えるべく、ページを割きました。この地震を契機に考えなければならない、多くのこと。のち、自然、ひと、家族。フジマニからのひとつのメッセージです。

日本は大きなひとつの家族だ。

２０１１年３月１１日午後２時４６分。東北と関東とを襲ったマグニチュード 9.0 の巨大地震が、一瞬にして数十万人の人々の生命と財産を奪いました。僕自身も藤沢のテナントビルの７Ｆにいるときに地震に遭遇。生涯で初めての強い揺れ、その後に報道される言葉にできないほどの被害の大きさ、そして原発事故という想像もしなかった恐るべき人災と、それに伴う電気や交通網といったライフラインの断絶。まるで悪い夢のように思える現実感の無い出来事が、これまで続いていきました。

そして、いまこの瞬間も原発という最前線で自衛隊員や電力会社職員や消防士が戦ってくれています。被災地へは藤沢市からもハイパーレスキュー隊が救援活動に発ちました。でも、そこにいない我々も最前線に立っているのだと思います。自分自身、連日の報道を横目で見ながら底知れない無力感を感じていました。そんななか仲間と「とにかく集まろう。なにができるかを考えよう」と会議をして「えいごや」や「地域魅力」ほかと立ち上げたのが『おちついてネット湘南（www.ochitsuite.net）』というウェブサイトです。それは微力ながらこの湘南を良くするパワーを持つものでした。仲間と手を取り合えば自分自身の最前線でまだできることはある。そう実感したとき、この災害を契機に、私たちは「問いかけられているんだ」とも思ったのです。

問いかけとはつまり、これまで直視せず後回しにして来た問題に真摯に向き合うということです。そのうちのひとつが私達が直面している「原発」という危機。この問題を乗り越えられるのか。そして乗り越えたとして今後どう生きていくのか。日本という国に生きる私たち一人ひとりが答えを出さなければなりません。この大震災の前と後とで、日本人の置かれている状況は変わりました。これまで物質的なあらゆる豊かさを享受して来た私たちが、これから迫り来る物質的・インフラ的欠乏をあらゆる方向から受け止めなければならないのです。しかし、そこにあるのはきっと絶望ではありません。そこにあるのは希望。その希望とは、この国のすべての人々がいま同じ方向を向いているということです。

震災後、関東の中にあってほぼ地震の被害が無かったはずのここ湘南でも、多くのひとが食料品を買い占め、ガソリンスタンドに列をなしました。それは結局、「家族を守りたい」という気持ちの表出であったのだと思います。その形は家族というワクを越え、「復興への想い」として見ず知らずの被災者の元へ、多くの支援や義援金などさまざまな形で被災地へ届いています。連日、海外のメディアで報道される、極限状態でも優しく他人を尊重し合う日本人としての振る舞い。それは家族がそれぞれの立場からそれぞれを支え合っている姿に似ています。そう考えたとき、出て来たキーワードが『ジャパン・イズ・ファミリー』でした。日本は、大きなひとつの家族だ。と。

駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまた草鞋を作る人。全ての持ち場を持った一人一人が互いに助け合い、決して投げ出さず、希望を持って今日を生き抜く事。今後、日本という国の経済や環境がどうなっていくのか…それはわかりませんが、家族を見捨てないように、誰も見捨てない。そして我々はまず、この湘南の街をまるで災害などなかったかのように動かす事。それがこの街で生きるわたしたちにできる最大の復興支援だと、いま思うのです。